

小学生における家族の喫煙習慣に対する考えと将来の喫煙行動 の予測との関連

廣原紀恵*・棟方百熊**・奥田紀久子***・郷木義子****

（2013年11月26日受理）

Relationship between the Opinion about Family Smoking habit and the Imagination of own future Smoking attitude in Elementary School Children

Toshie HIROHARA, Hokuma MUNAKATA, Kikuko OKUDA, Yoshiko GOHGI **

(Received November 26, 2013)

1 はじめに

日本人の喫煙率は年々減少していると報告されているものの、先進諸国と比較するとまだ高い状況にある¹⁾。また、喫煙開始年齢は低下してきていると言われ、小学生の喫煙率は5 - 20%と報告されている^{2) - 5)}。喫煙開始年齢が低いほど健康への影響が大きく、また、習慣化しやすいため、児童生徒の喫煙防止教育は重要である。このような社会的背景のもとA県では平成22年度より県医師会と県教育委員会とが防煙教育に関する協定を結び、互いに連携しながら学校における防煙教育を取り組み始めた。喫煙は自分自身だけではなく、周囲の人々へも健康被害をもたらすことなどについての知識を持ち、生涯において喫煙しない意思や態度を身につけるなどを目標としている。

本研究では、小学生を対象に家族の喫煙状況の実態と喫煙に対する意識を明らかにし、今後さらに効果的な防煙教育のために必要な基礎となる資料を得ることを目的としている。

*茨城大学教育学部教育保健研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Laboratory of Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

**岡山大学教育学部（〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1；Department of Education, Okayama University, Okayama 700 - 8530 Japan）

***徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（〒770 - 8509 徳島市蔵本町3 - 18 - 15 Major in Nursing, Graduate School of Health Biosciences, The University of Tokushima, Tokushima 770 - 8509 Japan）

****就実大学教育学部 〒703-8516 岡山県岡山市中区西川原1-6-1（Department of Education, Shujitsu University, Okayama 703-8516 Japan）

2 研究の方法と対象

平成 22 年度に県医師会の医師及び禁煙アドバイザーによる防煙教室の開催を希望した A 県内の小学校 20 校を調査対象とした。調査にあたりすべての学校に対して医師会の趣意書と県教育委員会の趣意書が送付された。質問紙調査は平成 22 年 5 月から 12 月に防煙教室の講座を受講する前に無記名、自己記入式により実施された。質問紙調査の内容は独自に作成したもので、家族の中での喫煙者、喫煙に対する意識、喫煙を勧められた際の態度、20 歳時での喫煙予測等であり、回答は選択肢から選択する方法によってなされた。対象の児童へは授業担当者により記入方法と質問紙の回答を提出しなくても成績等の不利にならないこと、無記名で個人が特定されないことを口頭で説明された。回答用紙は、児童自身が封筒にいれ回収した。

その結果、1273 名（回収率 100%）より回答を得、無効な回答を除く 4 年生 - 6 年生 1242 名を分析の対象とした（有効回答率 97.6%）。有効回答を得た内訳は、男子 630 名（4 年生 61 名、5 年生 102 名、6 年生 467 名）、女子 612 名（4 年生 67 名、5 年生 85 名、6 年生 460 名）である。なお質問紙の設問項目のそれぞれの回答率の有意差は統計ソフト SPSS（19.0 for windows）を用いて t 検定及び χ^2 検定された。

3 結果

(1) 家庭内の喫煙構成者

家庭内に喫煙者がいるのは 54.9%（682 名）、いないのは、45.1%（560 名）であった（表 1）。喫煙者は誰かすべてを挙げるように尋ねた結果（図 1）、男女ともに父親の喫煙が多く、全体では 43.0%（534 名）占め、次いで母親が 16.7%（114 名）だった。また、家庭内の喫煙者数は、「1 人」の場合が最も多く、35.3%（439 名）であった。家庭内の喫煙者数が最も多くいたのは「5 人」の 1 名だった。

表 1 家庭内の喫煙者の有無

	男子 (n=630)		女子 (n=612)		合計 (N=1242)	
	n	%	n	%	n	%
喫煙者いない	282	44.8	278	45.4	560	45.1
喫煙者いる	348	55.2	334	54.6	682	54.9

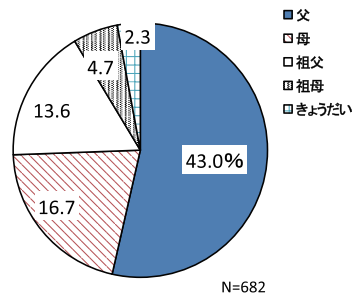


図1 家族の喫煙者の内訳

(2) 喫煙者に対する気持ちと喫煙に関する会話

喫煙者が家庭にいる児童について、喫煙者に対する気持ちを 3 項目の選択肢から選択させた結果を図 2 に示した。男子は、「やめて欲しい」50.9%（117 名）、「病気が心配」42.4%（147 名）、「特に気にならない」は 15.9%（55 名）であった。女子は、「病気が心配」61.4%（205 名）、「やめて欲しい」59.6%（199 名）、「特に気にならない」は 9.0%（30 名）だった。男子に比較し、女子は家族が喫煙することについて否定的な傾向が強かった。

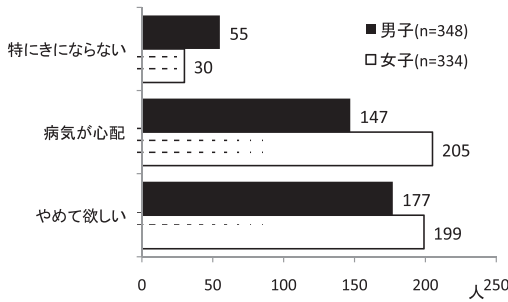


図2 家族への喫煙に対する気持ち(複数回答)

「たばこに関して家族と会話をするか」という設問に対して、男子で55.9% (352名)、女子で70.4% (431名) が会話をするとし、女子が男子より会話を多くしていた(表2)。

表2 家族とたばこに関する会話の有無

	男子(n=630)		女子(n=612)		合計(N=1242)	
	n	%	n	%	n	%
会話あり	352	55.9	431	70.4	783	63.0
会話なし	278	44.1	181	29.6	459	37.0

「会話をする」とした男女783名について、その内容を6項目から複数で選択させた結果を表3に示した。「健康に関すること」が50.2% (393名)、「タバコをやめること」が49.3% (386名)であった。たばこに関する会話の内容の男女差をみると、女子で「健康について」、「受動喫煙の影響について」の出現頻度が男子よりも高く見られた(p<0.05)。

表3 たばこに関する会話の内容

	男子(n=352)			女子(n=431)			合計(n=783)	
	n	%		n	%		n	%
タバコの害について	168	47.5	n. s.	201	46.6		369	47.1
タバコをやめること	173	48.9	n. s.	213	49.4		386	49.3
健康について	162	45.8	*	231	53.6		393	50.2
お金について	134	37.9	n. s.	137	31.8		271	34.6
火事について	40	11.3	n. s.	51	11.8		91	11.6
受動喫煙の影響	153	43.2	*	219	50.8		372	47.5

n. s. :有意無し * :p<0.05

家族に喫煙者がいる児童(以下、喫煙者有群)といない児童(以下、喫煙者無群)の2群に分け男女各々について会話の有無を検討した結果は図3に示した。男女ともに喫煙する家族がいる児童のほうがたばこに関して多く会話をしていた(p<0.001)。

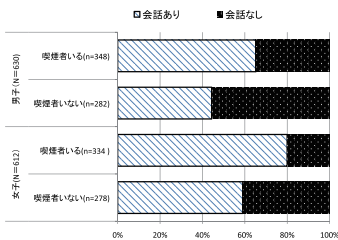


図3 たばこに関する会話の有無

（3）喫煙に関する意識

「喫煙することについてどう思うか」、4つの選択肢から1つ選ばせた結果を表4に示した。「絶対吸ってはいけない」が男子47.5%（299名）に対し、女子は53.6%（328名）、「吸うことは自由」は男子の20.5%（129名）に対し、女子は15.5%（95名）で4つの設問に対する回答の頻度には男女で差が認められた（ $p < 0.05$ ）。

表4 タバコを吸うことをどう思うか

	男子 (N=630)		女子 (N=612)		合計 (N=1242)	
	n	%	n	%	n	%
絶対吸ってはいけない	299	47.5	328	53.6	627	50.5
よくわからない	121	19.2	100	16.3	221	17.8
少しなら吸ってもかまわない	81	12.9	89	14.5	170	13.7
たばこを吸うのは自由	129	20.5	95	15.5	224	18.0

次に男女各々について喫煙者有群と喫煙者無群間で「喫煙することについてどう思うか」を比較検討した結果を図4に示した。家族に喫煙者無群では、「絶対吸ってはいけない」とする男子は52.8%（149名）、女子61.2%（170名）、喫煙者有群では男子43.1%（150名）、女子47.3%（158名）だった。男女ともに、喫煙者無群のほうが、「絶対に吸ってはいけない」とする頻度が高かった。男女とも喫煙者有群と喫煙者無群の回答に頻度の差が認められた（ $p < 0.01$ ）。

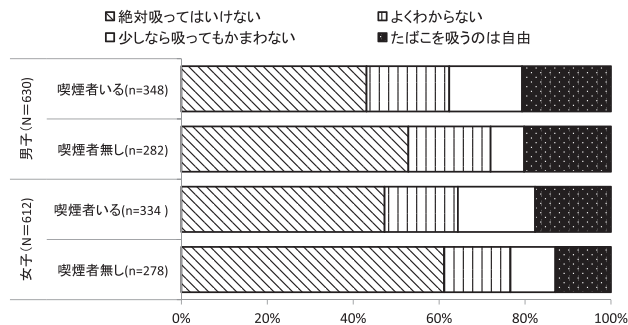


図4 喫煙することについてどう思うか

（4）喫煙勧奨された時の行動予測

「誰からか喫煙を勧められた時にどうするか」について5つの選択肢から1つ選ばせた結果、「絶対断る」は男子69.2%（435名）、女子76.3%（467名）、「断らない」は、男子1.0%（6名）、女子0.3%（2名）であった。男女間の回答の頻度に差が認められた（ $p < 0.05$ ）（表5）。

表5 誰からか喫煙を勧められたらどうするか

	男子 (N=630)		女子 (N=612)		合計 (N=1242)	
	n	%	n	%	n	%
絶対断る	435	69.0	467	76.3	902	72.6
たぶん断る	125	19.8	100	16.3	225	18.1
わからない	49	7.8	28	4.6	77	6.2
断らないかもしれない	15	2.4	15	2.5	30	2.4
断らない	6	1.0	2	0.3	8	0.6

喫煙者有群と喫煙者無群で男女各々を「誰からか喫煙を勧められた時にどうするか」を検討した結果は図5に示した。家族に喫煙者無群では、「絶対断る」とする男子は72.0%（203名）、女子は80.2%（223名）で、「断らない」は、男子0.4%（1名）、女子では皆無だった。喫煙者有群では「絶

対断る」は男子 66.7% (232 名), 女子 73.1% (244 名) だった。「断らない」は, 男子 1.4% (5 名), 女子 0.6% (2 名) だった。男子では喫煙者有群と喫煙者無群で回答の頻度に有意な差は認められなかったが, 女子では差が認められた ($p < 0.01$)。

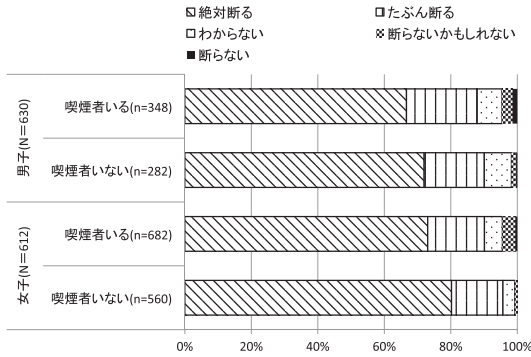


図5 喫煙者の有無別による誰からか喫煙を勧められたらどうするか

次に父親の喫煙の有無により, 喫煙者有群と喫煙者無群で「誰からか喫煙を勧められた時にどうするか」を検討した結果は図6に示した。男子は父親に喫煙者無群では, 「絶対断る」とするのは72.6% (257 名), 「断らない」は, 0.3% (1 名) だった。父親に喫煙者有群では「絶対断る」は64.5% (178 名) で, 「断らない」は, 1.8% (5 名) だった。女子は, 父親に喫煙者無群では, 「絶対断る」とするのは78.5% (278 名), 「断らない」は, 皆無だった。父親に喫煙者有群では「絶対断る」は78.3% (189 名) だった。「断らない」は, 0.8% (2 名) だった。男女ともに父親の喫煙者有群と喫煙者無群では回答に有意な差はみとめられなかった。

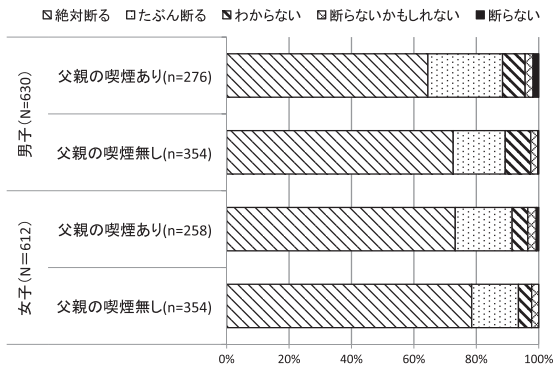


図6 父親の喫煙の有無別喫煙を勧奨された時の態度

母親の喫煙の有無により, 喫煙者有群と喫煙者無群で検討した結果は図7に示した。男子では母親に喫煙者無群では, 「絶対断る」とするのは69.5% (362 名), 「断らない」は, 0.8% (4 名) だった。母親に喫煙者有群では「絶対断る」は67.0% (73 名) で, 「断らない」は, 1.8% (2 名) だった。喫煙者有群と喫煙者無群で回答に有意な差は認められなかった。一方女子は, 母親に喫煙者無群では, 「絶対断る」とするのは78.6% (403 名), 「断らない」は皆無で, 母親に喫煙者有群では「絶対断る」は64.6% (64 名) で, 「断らない」は, 2.0% (2 名) だった。喫煙者有群と喫煙者無群で回答に有意な差が認められた ($p < 0.001$)。

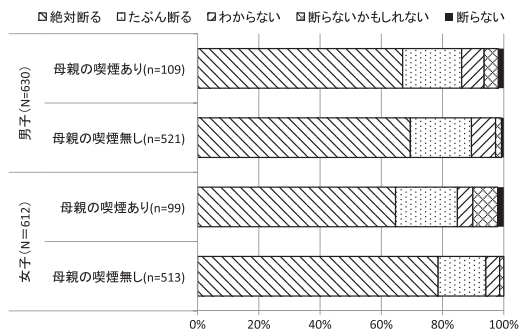


図7 母親の喫煙の有無別喫煙を推奨された時の態度

(5) 将来の喫煙行動予測

「将来大人（20歳）になったとき、たばこを吸うと思うか」について、5つの選択肢から1つ選ばせた。「絶対吸わない」は男子55.6%（350名）、女子65.8%（403名）で、「たぶん吸う」男子2.2%（14名）、女子1.3%（8名）で男女間の回答に差が認められた（ $p < 0.05$ ）（表6）。

表6 将来大人になったときの喫煙予測態度

	男子 (N=630)		女子 (N=612)		合計 (N=1242)	
	n	%	n	%	n	%
絶対吸わない	350	55.6	403	65.8	753	60.6
たぶん吸わない	166	26.3	148	24.2	314	25.3
わからない	62	9.8	33	5.4	95	7.6
吸ってみるかもしれない	38	6.0	24	3.9	62	5.0
たぶん吸う	14	2.2	8	1.3	22	1.8

喫煙者有群と喫煙者無群で将来喫煙するかどうか、予測態度を比較検討した結果は図8に示した。家族に喫煙者無群では、「絶対吸わない」とする男子は62.8%（177名）、女子は75.9%（211名）で、「たぶん吸う」は男子0.4%（1名）、女子では皆無だった。喫煙者有群では「絶対吸わない」とする男子49.7%（173名）、女子56.6%（189名）だった。「たぶん吸う」は、男子3.7%（13名）、女子2.4%（8名）だった。男女ともに喫煙者有群と喫煙者無群の回答に有意な差がみとめられた（男子； $p < 0.01$ 、女子； $p < 0.001$ ）。

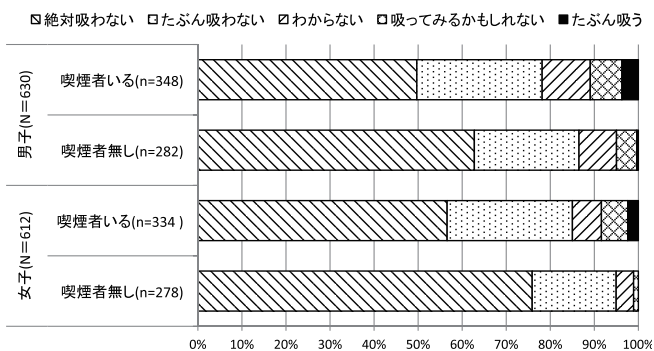


図8 大人になったとき喫煙すると思うか

次に父親の喫煙の有無により、喫煙者有群と喫煙者無群で検討した結果は図9に示した。男子は父親の喫煙者無群では、「絶対吸わない」とするのは63.3%（224名）、「たぶん吸う」は、1.1%（4

名) だった。父親の喫煙者有群では「絶対吸わない」は 45.7% (126 名) で、「たぶん吸う」は、3.6% (10 名) だった。女子は父親の喫煙者無群で、「絶対吸わない」とするのは 72.6% (257 名) だった。「たぶん吸う」は、0.3% (1 名) だった。男女ともに回答に有意な差がみとめられた ($p < 0.001$)。

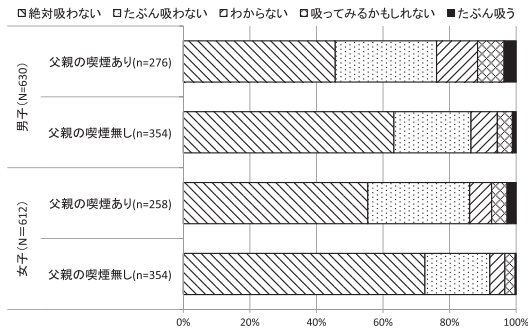


図9 父親の喫煙の有無別将来喫煙予測

母親の喫煙の有無により、喫煙者有群と喫煙者無群で検討した結果は図 10 に示した。男子は母親に喫煙者無群では、「絶対吸わない」とするのは 55.7% (290 名)、「たぶん吸う」は、1.9% (10 名) だった。母親の喫煙者有群では「絶対吸わない」は 55.0% (60 名) で、「たぶん吸う」は、3.7% (4 名) だった。喫煙者有群と喫煙者無群で回答に有意な差は認められなかった。女子は母親の喫煙者無群では、「絶対吸わない」とするのは 69.7% (355 名)、「たぶん吸う」は、0.6% (3 名) だった。母親に喫煙者有群では「絶対吸わない」は 45.5% (45 名) で、「たぶん吸う」は、5.1% (5 名) だった。母親の喫煙者有群と喫煙者無群で回答の頻度に有意な差がみとめられた ($p < 0.001$)。

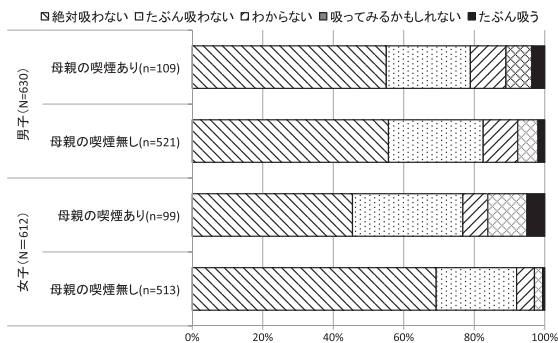


図10 母親の喫煙の有無別将来喫煙予測

4 考察

家庭に喫煙する家族がいる児童は 682 名で全体の 54.9% を占め、その主な喫煙者は父親の 43.0% であり、次いで母親の 16.9% であった。これは厚生労働省⁶⁾の調査結果と比較すると、男性、女性ともに喫煙率は高い割合である。しかし、小学生の父親、母親世代の 30 歳代、40 歳代と比較すると父親の 43.0% の喫煙率は低く、母親の 16.9% の喫煙率はほぼ平均である。調査対象の児童の家庭における喫煙する者の状況は、全国的にみると悪い状況ではないと思われる。社会全体としては、男性の喫煙率が下がっている一方で女性の喫煙率は微増し、特に 20 歳から 30 歳の年代層の喫煙率は高いという問題がある。

本調査対象の女子児童は、家族の喫煙について男子よりも関心を持ち、たばこに関する会話も女子の方が多く家族としている傾向であった。会話の内容は「健康について」や「受動喫煙の影響」について会話を多くし、「病気が心配」だから「やめて欲しい」と思っているようであり、喫煙に関して女子の方が否定的である。

本調査児童の喫煙に対する意識や将来の喫煙予測と家庭に喫煙する家族がいる場合とは関連していた。これらは、先行研究で報告されたものと一致するものであった^{7) -10)}。家庭に喫煙する家族がいる児童は、喫煙する家族がない児童に比較し喫煙に関して「絶対吸ってはいけない」とする頻度は低かった。家族の喫煙は児童の喫煙に対する規範意識を低くするものと思われる。

「たばこを吸うことを勧められた際どのような態度をとるか」については、喫煙する家族の有無による統計的な有意な差は男子では認められなかった。しかし、喫煙する家族がない場合には、「絶対断る」とする頻度は高かった。女子では喫煙する家族の有無により有意な差が認められた。たばこを勧奨された際のとり態度についても、喫煙に対する考え方と同様に家族の影響を受けている。詳細に検討すると、男女ともに父親の喫煙には影響されないが、母親の喫煙の有無には男女ともに影響され特に女子は大きく影響されていた。

「将来喫煙するかどうかという予測態度」については、男女とも家族に喫煙する者がいる場合に大きく影響されていた。喫煙者がいる場合には、将来喫煙するであろうというという予測を持つ児童が多く、家族の喫煙は大きな問題といえよう。渡邊ら¹¹⁾は、中学生対象に将来の喫煙行動の予測調査をし、7年後に同一対象者に調査をした。その結果、中学時に喫煙すると予測したものは、成人時には喫煙する傾向を示したとしている。本調査対象の児童が、小学生時点ですでに将来の喫煙を予測することは、中学時点で調査した渡邊ら¹¹⁾の喫煙予測よりも成人時で喫煙者になる頻度は高いかもしれない。将来の喫煙予測行動は、男女ともに父親の喫煙に影響を受け、母親の喫煙は特に女子は大きく影響を受け、男子は影響されなかった。父母の喫煙が児童の喫煙開始のハードルを下げていることがうかがえる。また、辻ら⁴⁾は、小学生の喫煙の経験は父親の喫煙状態には影響されないが、母親の喫煙には影響が見られたとしている。今回の調査では児童に対し児童自身の喫煙経験の有無は尋ねていないが、将来の喫煙をするだろう予測態度が、特に女子では母親の喫煙に大きく影響されることが明らかとなり、母親の喫煙行動は問題である。女子は母親との会話頻度、時間が男子よりも長いこともあり¹²⁾、母親の生活習慣や行動の影響を受けやすく、中学、高校と学年が進むにつれ母親と心理的距離も近づき¹³⁾、さらに価値観などより強く母親の影響受けやすいと思われる。また、女性は母親との依存、絆が比較的強いままに維持されていく関係も指摘され¹⁴⁾、若年女性の喫煙率が微増しているのもこのような背景があるのではないだろうか。家族に喫煙する者がいる女子の方が、喫煙に関する会話を多くし、健康被害、断煙についても考えているにも関わらず、母親の喫煙行動には影響を受け、喫煙に対して寛容な考えになっていくことは母子関係にも問題があると思われる。

一方男子は、喫煙を勧められた際「断らない」、「将来喫煙するかもしれない」と回答する児童が女子よりも高い頻度で見られ、全般において男子のほうが女子よりも喫煙リスクが高い結果となった。このことは、日本の社会全体で男性の喫煙率が高いことも反映しているのではないかと思われる。さらに向井¹⁵⁾が報告しているように女子よりも男子の方が喫煙、飲酒などの問題行動を経験していることと一致するものである。特に男子に対する喫煙防止のための教育が必要であろう。

5 まとめ

今後の防煙教育に活かしていくことを目的として調査した。教育の効果については、短期的には効果があると報告されている¹⁶⁾¹⁷⁾。しかし、長期にはなかなか定着せずに喫煙開始する以前の早期に教育することが望ましいとされ¹⁶⁾¹⁸⁾、より低年齢の段階で喫煙の習慣化をさせないことが大切かと思われる。小、中、高等学校と学年が上がるにつれ喫煙経験率は男女共に高くなるので¹⁹⁾、本人の喫煙意識、喫煙行動を抑制するような教育内容を検討し、継続的に取り組むことが大事である。

学校の教育だけでは不十分で喫煙の社会的な受容度を減らす取り組みが必要であることも指摘されている²⁰⁾。今回の調査でも明らかになったように、家庭での保護者の喫煙態度が小学生の喫煙に対する意識に影響していたため、学校教育だけでなく喫煙する保護者への防煙に対する啓発も必要であろう。あるいは家族の喫煙構成員全員に対して社会的資源を利用し、禁煙への支援をするなどの取り組みも必要かと思われる。学校関係者のみならず、医療関係者や医療従事者等が、禁煙への声掛けや禁煙への支援体制を整えていくことが必要であろう。すなわち家庭環境や社会全体も考慮しての対策が有用かと思われる。

なお本研究は、文部科学省科学研究費助成事業採択課題 23590743 の一環として行った研究報告である。

6 引用文献

- 1) 国民衛生の動向 2011/2012 年：2011『厚生労働統計協会』58
- 2) 松村常司・鎌田三千代・佐藤和子他. 2000. 「中学生の喫煙に関する行動・態度・環境とセルフエスティームとの関連」『教育医学』46, 1153 - 1162.
- 3) 久保元芳・野津有司・佐藤孝他. 2008. 「我が国の青少年における早期の喫煙、飲酒の初回経験と高校生時の危険行動の複数出現との関連」『学校保健研究』50, 123-136
- 4) 辻雅善・角田正史・鈴木礼子他. 2008. 「小・中学生の喫煙に関する意識と行動」『目白大学短期大学部研究紀要』44, 85 - 96
- 5) 廣原紀恵・奥田紀久子・青木圭子他. 2010. 「小学生への防煙教育の効果及び家族の喫煙に関する実態調査」『日本禁煙科学会学術総会抄録』26
- 6) 厚生労働省の最新たばこ情報 成人喫煙率 <http://www.health-net.or.jp/Tabaco/product/pd100000.html> 2012年2月14日アクセス
- 7) 大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳. 2001. 「中学生の喫煙意図と保護者の喫煙行動、養育態度との関係」『学校保健研究』43, 426-434
- 8) 今出友紀子・川畑徹朗・石川哲也他. 2007. 「思春期の子どもたちの喫煙開始に関わる要因」『学校保健研究』49, 170-179
- 9) 安藤美津子・峠哲男. 2008. 「中学生の喫煙の状況と保護者の喫煙に対する意識の関与 喫煙に関する中学生と保護者の同時調査」『香川大学看護学雑誌』12, 7 - 17
- 10) 大塚敏子・荒木田美香子・三上洋. 2010. 「高校生の将来喫煙のリスクからみた特徴の分析 喫煙防止教育の検討に向けて」『日本公衛誌』57, 366-380

- 11) 渡邊正樹・岡島佳樹・高橋浩之他. 1995. 「7年間の追跡調査に基づく青少年の喫煙予測モデル」『日本公衛誌』42, 8-18
- 12) 壁谷澤万里子・長澤由喜子. 1985. 「中学生の母子意識にみる親子関係（第2報）」『日本家庭科教育学会誌』28, 66 - 72
- 13) 中村真・松井洋・堀内勝夫他. 2007. 「親子関係と青少年の非行的態度」『川村学園女子大学研究紀要』18, 123 - 140
- 14) 渡邊恵子. 1997. 「青年期から成人期にわたる父母との心理的關係」『母子研究』18: 23-31
- 15) 向井隆代. 2008. 「中学生の問題行動と両親の養育態度との関連」『臨床発達心理学研究』7, 54 - 63
- 16) 遠藤明・加藤正人・吉井千春他. 2008. 「高校生の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果」『日本禁煙学会雑誌』3, 7 - 10
- 17) 遠藤將光. 2010. 「小学生における禁煙教育の有用性について」『禁煙科学』3, 30 - 33
- 18) 赤荻栄一. 2008. 「小学5年と中学2年時に重ねて行なった喫煙防止教育と中学3年生に対するたばこアンケート10年の結果」『学校保健研究』50, 385-391
- 19) 市原国夫・渡邊正樹・岡田加奈子他. 1992. 「青少年の喫煙行動 日本青少年喫煙行動の結果より」『学校保健研究』34, 319 - 328
- 20) 神田秀幸・尾崎米厚・谷畑健生. 2005. 「未成年を対象とした喫煙対策の世界的動向」『保健医療科学』54, 278 - 283